

フルキョロ ノエルの恋物語

ロマンス

The title 'フルキョロ' is written in a large, stylized, outlined font. To its right is a small illustration of a character riding a horse. Below 'フルキョロ' is the subtitle 'ノエルの恋物語' in a smaller, simpler font. To the right of the subtitle is the word 'ロマンス' in a large, stylized, outlined font.

空蝉

原作：Ricotta / 表紙：こもりけい / 挿絵：はっとりまさき

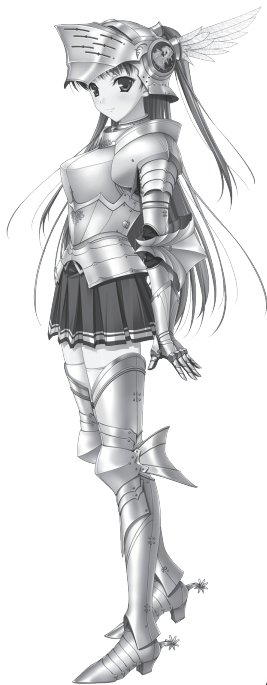
立ち読み版





登場人物紹介

Characters



ノエル・マーレス・アスコット

侯爵家のお嬢様。明るい性格で人懐こいが、幼い頃から社交界に接してきたため、時折淑女らしい振る舞いを見せる。ジョストの腕は一流で、試合を楽しみにしている妹・ミレイユのために、ジョスト大会での優勝を目指していたが……。



き さ き み お
希咲 美桜

家庭的な性格で家事全般が得意な少女。以前から知り合いの貴弘に何かと世話を焼く。



スーリア・クマーニ・エイントリー

ウィンフォード学園学生会会長を務める三年生。その美貌と堂々とした姿勢で全校生徒から強く支持されている。



み ず の た か ひ ろ
水野 貴弘

ウィンフォード学園二年生。怪我のため騎士の道を諦めてベグライターを専攻する。

リサ・エオストレ

類似希なジョストの才能を持つ一年生。普段は無口で無愛想。

カイル・L・オルブライト

貴弘のクラスメイトでベグライターを目指す青年。

グレイフル・マーレス・アスコット

代々続く商家であるアスコット侯爵家当主。厳格な性格の持ち主。

ミレイユ・マーレス・アスコット

ノエルの妹。幼い頃からジョストが好きで、姉のノエルを応援している。

フィオナ・ベックフォード

リサのクラスメイト。自尊心が高く、周囲と衝突する事がある。

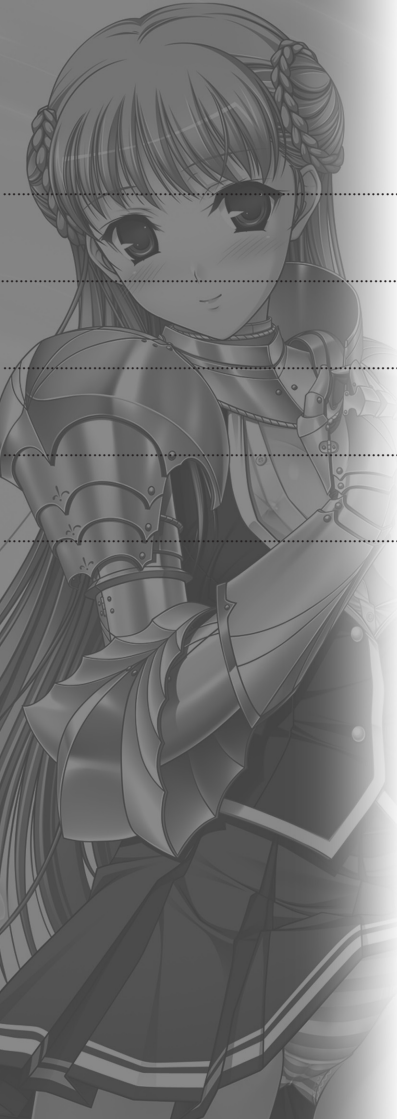
ベルティーユ・アルチュセール

自信家のお嬢様。高飛車で多少口うるさいが、どこか憎めない性格。

ひ ら ぎ あ や こ
柊木 綾子

貴弘の従姉。
ウィンフォード学園の保健医兼タルトタイムの店主。





CONTENTS

◎第一話 騎士たちの休息	7
◎第二話 頂を目指して	50
◎第三話 家族	105
◎第四話 そしてまた始まる、頂への道	155
◎第五話 あなたと歩む、日々の幸せ	218



「あつつつ……そ、そつちがその気ならあ……えい♥」
ぐりゅりゅつ……。

「うお!？」

悪戯心と茶目つ気。さらには機転が利いて、負けん気まで兼ね備えた恋人が黙ってやられっぱなしになるはずもなく。指圧している側とは逆の足、ニーソックスに包まれたそのつま先で、股間のふくらみをなでなで。やんわりとした調子で擦りだす。

「ちよ、ちよつとノエル……ここで!？」

具足脱ぎたての足はソックス越しでもわかるほどにホカホカで、触れた股間がビクリ、跳ねる。

「だって……貴弘が、大きくしてくれてる。昂奮してるんだって思ったら、私……。う、嬉しくなってしまうたんだもの……」

（恥ずかしそうにはにかんで、大胆な発言してくれちゃって）

上目遣いでこちらの意思を問うてくる。

「そんな顔されたら、断れるわけじゃないか……」

思い返してみると、以前足でもらったのも、こうして控え室でふたりきりになった時だった。

（あの時はたしか試合後で……俺が、ノエルのなら足だけでもイケる、だなんて言っちゃ

ったのが発端だったつけ)

すっかり嗜虐心の芽生えた恋人に心ゆくまでたっぷり搾り取られたことまで思い出し、赤面する。

案外頑固で言い出したなら聞かない性分のノエルのことだから、今さらなにを言っても引き下がりはずまい。

(それに俺のほうも……このままじゃ)

腰の芯にたぎった熱は、恋人の足で愛でられている限り収まることはない。

「わ、わかった。脱ぐからっ……ちよっと待った！」

さすがにこのまま、ズボンの中で暴発させるわけにはいかない。手早く自らベルトを外し、そそくさとズボンをトランクスごとずり下ろす。

長いベンチにノエルと向かい合う格好で跨がって、求められるまま腰を突き出し、勃起を彼女の目前に見せつけた。

「すごいわね……。先っぽから、もうおつゆが漏れて、少しつっただけではち切れてしまいそう……。あ……ひよつとして前回の、癖になっちゃったとか？」

初めて足でもらったあの日と同じ悪戯っぽい微笑みを口元に湛えたまま問うてくる恋人に、嘘をつけるわけもない。

「……否定はしないよ」

返事に満足した彼女はゆっくりと足裏をペニスの先端に乗せ、触れ心地を確かめるみたいに、さわさわ。微細な刺激を与えだしてくれた。

「こんな感じ、だったわよね？」

ぎこちなく、亀頭を中心に扱かれる。手や口でもらう時とは違ったもどかしさを感じるけれど、そのもどかしさがまた焦らしのような効果を生んで、よりいっそう牡の欲望を駆り立てる。

「う……あ、あ……うん、いい、よ……」

喘ぎ混じりの声を受けて、なおいっそうノエルの足は積極的に勃起の上を這い回った。つま先で鈴口を突つつくような動きをしたかと思えば、足の凹みを満遍なく使って、亀頭の丸みと擦り合わせるような動きへとシフトする。

「く、つ、あ……そ、そこっ」

「ふふ。さつきとは立場が逆になっちゃった」

ささやきながらも足の動きは止めず。求めに応じて裏スジを足の中指でそっと、なで扱いてくれた。

びくびくと跳ねる肉棒からの歓喜のシグナルを腰元で受け止めながら、視線は恋人の股間、その付け根へと一直線に惹きつけられっぱなし。

「今日、も……ストライプ、なんだ……」

ノエルお気に入りのストライプ柄。本日はピンクと白の縞模様だ。

「もう。どこ見てるの」

熱視線を受けてか、ショーツの中央にはじわじわとシミが広がりだしていた。

（見つめられるだけで、感じてる？ それとも……俺のを、扱いてるから昂奮して……）

はしたなくも、愛おしい。恋人の一挙手一投足に逐一胸躍らされて——ますます勃起は雄々しくたぎってゆく。

硬度が増した分足との摩擦はよりダイレクトに、強く伝わって、足指の腹で軽くなでられただけでも、腰が浮き上がるほどの快楽を得ることができた。

「んふ。ピクピク鼓動してるの、なんだかとても愛おしい……」

「……っ、俺だつて。ノエルのソコが濡れてるって思うだけで、すごく嬉しくなってる」

丁寧に扱ってあげたいと思う反面で、ぎゅつと、力いっぱい抱き締めたくもある。

愛情と独占欲との狭間で揺れる気持ちを吐露すれば、恋人は火照った頬を緩めてまた微笑んでくれた。

「本当に、似たもの同士よね、私たち。ぎゅう」

二本の足で抱き締めるがごとく、青筋の浮いた肉幹が挟みつけられる。手とは勝手の違うぎこちなさが不規則な圧迫を生み、肉の棒が悦びに弾む。

「あつ、また……弾んで……。んもう、甘え上手な貴弘のおかげで、もっともっとたくさ

ん、なでてあげたくなっちゃう……」

濡れてるところ、あまり見ないで——。

そう告げた恋人の瞳もまた潤みきっていて、言葉とは裏腹にまるで誘うようなその揺らめきに導かれるまま。ストライプショーツのシミを凝視し続ける。

「んっ……。もう……。そっちがその気なら、こっちだつて」

ニーソックスの白い生地に先走り汁が絡んでは、ニチャニチャと卑猥な音色を奏でていた。ノエルはその粘り気をも利用して、器用に竿に塗り込め、よりいっそう摩擦のペースを上げてゆく。

「く、う、ううっ……」

「感じる時の、あなたの顔が好き。声も……。見てるだけ、聞いてるだけでおなかの奥がうずいてきちゃう……」

乱れた吐息を吐きこぼすノエルの表情だつて——涙を湛えた大きな瞳、火照り赤らんだ頬から首筋、よだれをこぼしそうになるのを必死に我慢して結ばれている、震えっぱなしの唇。魅惑的で、目が離せない。

「ね……。私のも、触って……。？」

熱っぽく求められ、感応した勃起ペニスが、唇が返答するよりも先にビクビク。反り返りながら飛び跳ねて、言葉よりも雄弁に意思を伝えた。



「つ、でも、この姿勢じゃ……」

嬉しさを表すみたいにスリスリと幹をなで擦られ、甘い喜びに溺れつつも思案する。

対面姿勢でノエルの足愛撫を受けている状況下。体勢的に口や手で彼女の股間を愛でることは難しい。おのずと、選択肢は限定された。

「あ、足でっ。貴弘の足で……して欲しい……」

「わかつ……た」

飲み込んだ生唾の音が、やたら大きな音を立てた気がして、また赤面。

靴を脱いだ片足をそろりと伸ばし、ストライプ柄に沿うようにつま先を押し当てる。

ぶ、ちゅうっ……。

「ひあんっ」

着地するなり、指の腹にネットリと熱い汁の感触。軽く圧を加えただけで、布地の奥の割れ目に溜まっていた蜜が押し出され、染み出てきた。

(足で俺のを擦ってるだけで、もう、こんなに……)

愛されているという喜びが胸に染み、奉仕への熱意に成り代わるまで、さほどの時間も要さなかった。

「ふ、あ……貴弘っ、上手、う……♪」

シミの浮いた部分の中心地。縦スジに沿って扱かれたノエルが、指を嚙んでなお抑えき

れない甘い声を漏らしだす。

しゅっ、しゅににゅっ……。

「あく……!! ノエル、だつて……前した時よりずっと上手くなつてるよっ……」

自身のへそ方向へ反り返ろうとする肉竿は、十本の足指に抱きとめられ固定されている。軽く握るような動作を繰り返すその指に順次圧を加えられ、悦び勇んだ肉の棒が暴れだす。血液のたぎりと、歡喜の鼓動とを受け止めて、ひとりでに揺らいだ腰が、ベンチからずり落ちそうにもなつた。

「足癖が、悪いんだか、らっ、ああ……っ」

「それもおたがいさま……っ、だろ……?」

軽口を叩き合いながら、ふたり一緒に昂っていく。

(あ、く、……っ!! こ、これは予想以上に……っ)

熱心に幹を扱くノエルの足のリズムは不規則で、おまけに左右それぞれが別個のタイミングでカリ裏を擦り立ててくる。予測しづらいだけに堪えるということが難しく、瞬く間に肉の棒は情欲のマグマを溜め込んでいった。

頻繁に左右のリズムを組み替えるのみならず、縦笛を吹くみたいに次々入れ替わりで十本の足指が肉の幹に圧を加えてくるのも――。

「気持ちいい?」

「あ、あぁっ、いいっ……よ……!!」

強がることも忘れて素直に返事してしまうくらいに、たまらなく気持ちがよかった。

喜悅に浸った肉竿は脈を打ち続け、トロトロと濃密な先走りのツユを吐き漏らしてしまう。どうやら自分で想定してたよりもずっと早くに、その瞬間は訪れそうだ。

びぐんっ!

「あっ……も、もう……出そう?」

カリ首を刺激されて大きく弾んだ肉棒の脈動。その中に潜む予兆にいち早く気づいたノエルが、少し上ずった声で尋ねてくる。

「うっ、あ、あぁ、もう……我慢、できそうにない……っ」

素直に実情を告げると同時に、ツツ……と少々強めにショーツの中央を指腹でなぞってみせた。

「ひゃっ……あ……!!」

また、温かな蜜がジュワリと噴き出すのを足指で感知する。

軽く押すだけで深く沈みこむ、柔らかさと弾力を兼ね備えた恥丘の感触と、すべやかな下着の感触とを同時に堪能しつつ。腰の底に堆積していた情欲の塊を、少量ずつ、徐々に解き放つてゆく。

「あ、ふ……っ、そん、なにされたら……私のほうが先にイってしまうわ」

「っ、う……！ 今日、一緒に……イって、くれないのか……？」

「だって……私のほうがいつもたくさんイかされてるじゃない？」

だから、時々はこうして帳尻を合わせておかないや——。

うっとりときさやいた少女の瞳と唇が、いつもの悪戯っ子のそれに早変わり。

「くっ、ううっ……!？」

右足の親指と中指で器用に亀頭が挟み込まれ、鈴口には人差し指が乗った状態で回転摩擦を加えられ。左足のつま先には、勃起の根元、熱と白濁を溜め込んだ玉袋をこれでもかと執拗にこね回された。

(や、ばいっ……も、もう……っ！)

扱かれるたびに幹が震え、乗っかる彼女の指腹に際限なく快感のしるし、いつそう濃くなつた先走りのツユを噴きつける。

思わず反り返つた己の足のつま先が、恋人のストライプ柄ショーツの上でたたら踏む。

「ふあっ……！ ね……貴弘……。イク時の顔、ちゃんと見せて……♥」

玉と竿の裏スジを、同時にもみほぐされた瞬間。

「う、くうう……ッッ！」

——ドクンッ！

優美さと淫靡を兼ね備えた恋人の笑みに見つめられ、爆発的に高まった射精衝動が勢い

そのままに噴き出した。

「あ……っ！ す、ごおい……」

びゅぐっ、びゅるるっ！ びゅっ、びゅびゅううっ！

放物線を描いて飛んだ白濁のマグマは、ノエルのふとももをかすめ、へそ付近や脇腹、胸元にまで付着して、ヌラヌラ。天井からの照明を浴び、ひと際妖しく照り返る。

「やあ、っ……ン……貴弘の、におい……いっぱあい……」

「はあっ、は、ああ……っ！」

鼻を鳴らし、惚けたみたいにうっとりとしたノエルの表情に魅入られ、また。早鐘のように鳴る胸の鼓動に合わせて、腰の芯底から白濁のマグマが噴き上がる。

びゅびゅううっ！ びゅぐ、びゅぐびゅびゅううっ！

今度は肉づきのよい彼女の内腿へ。ほぼ一直線に飛んでぶつかり、べつとりと付着した。「あ……っん。熱い……。ふふっ……なんだか変な気分……。いつもはおなかの奥で感じる熱を、今は……ショーツ越しに、感じてる……」

もどかしくて、よけいにうずいてしまうわね——。

つぶやきともささやきとも取れる恋人の小声を聞き、射精直後だというのに勃起は一向に萎える気配なく、天を突き反り返る。

「……今度は、俺の番」

気だるさすらはね除けて、再び足早に恋人の股下へとひざまず跪く。

「……貴弘？ あ。ちよ、ちよつと近い……い、息つ、吹きかかっちゃ……ふあ！」
今は敏感になっているから——。

言い募るノエルの制止を振り切つて、縞模様の布地に鼻先を押しつけ、彼女の股間を刺激する。わざと派手に鼻を鳴らすことで侯爵家令嬢の羞恥を煽り立て、三度染み出てきた蜜の濃厚さを、布一枚隔てた間近で堪能した。

「ノエルのも……すぐく、硬くなつてる……」

「んうっ！ そ、そこはだめっ……」

ショーツ越しでもはつきり位置を特定できるほどに膨らんだ、大きめのクリトリス。敏感すぎる性感帯を、わざとやんわり。決して急くことなくなで擦り、攻め立ててやる。

「い、いじわるう……やつ、あ、あひっ……！！」

「ぢゆるっ……！！ 飲んでも、ろんれほ……はふれへふる」

「ひう！ んっ、くうんん！ くっ、口づけたまましやべらないでえ……！！」

飲んでも飲んでもあふれてくる蜜汁を、ショーツの布地ごと啜り、えんげ嚥下した。甘酸っぱい味わいをじかに飲みたいという想いは強くあつたけれど、決して下着をめぐつて直接なめることはない。

「はう……っ、やあ、あつ、あつ、ひ……！！ もう、も、お……お願いよ貴弘……っ」

「ちゃんと、はつきりと聞かせて……?」

唾液と蜜とでベチヨベチヨの下着ごと、指先と鼻先を使って圧を加える。

その都度ノエルの喘ぎのトーンは一段ずつ高まって、じきに切羽詰まった様相でひっきりなしに響きだす。

「入れて、欲しいの……っ。貴弘と、ひとつに……っ、なりたい……」

反らせた喉を震わせながらの懇願に、肉棒は迅速に感応し、先ほど以上に硬直。負けじと反り立ち、自己主張を再開した。

「なにか、ご要望はございますか、姫」

内心の昂揚を押し隠すため——恋人の観察眼の前では無駄と知りつつ——おどけたしぐさとともに問いかける。

「……見つめ合いながら、いい。抱っこ、して……」

返された内容と、拗ねたように唇尖らせた様が予想以上に愛おしくて。反射的に細腰を抱き寄せて、そのまま勃起を濡れそぼつ彼女の秘処へと押しつけてしまった。

「ひゃ……あ……貴弘の、あったかいのが、当たってる。とっても元気に弾んで……そっちだつて、もう、我慢できなかつたんじゃない……」

——カリッ。

「……っ」

意地悪したお返しよ。そう耳元でささやいた恋人の唇に、浅く甘噛みされた。

噛まれた上唇がやたらと熱っぽく感じるのは、それだけ腕の中の温みと柔らかさに、耽溺^{たんに}しているから。

左右の手のひらいっぱい抱き締めた尻肉はボリリューム充分。ともすれば手からこぼれ出そうになるそのボリリューム感に弾力と温み。それらをもみ込むことで思う様堪能し、喘ぐ恋人の声に、なお情欲を高めてゆく。

「このまま……入れていい？」

「……聞かなくてもわかっているくせに……」

また唇尖らせた恋人の、誘うような視線に魅入られたまま。手早く指で縞々ショーツを脇に寄せる。

「お、重くはない？」

鎧を着たままだから、と申し訳なさげに言う彼女の尻を、ふたもみ。反射的に顔を上げた恋人を安心させようと笑顔で出迎えた。

「女の子ひとり抱えられないほど、やわじやないぞ」

「ひっ、あ、ああ……っ、も、うっ、焦らさないで……っ」

クチクチと性器同士を擦り合わせれば、たちまち震えを強めた膣口から真新しい蜜があふれ出し、位置を簡単に特定することもできた。

『好きな相手のことは、よく知りたい』

もどかしい快樂にしびれゆくさなか。不意に、いつか彼女がささやいた言葉を思い出す。
 (本当に……その通りだと思ふよ。だつて、俺……今も、こんなに……)

もつともつとノエルのいろんな表情を見てみたい。拗ねた顔も、喜ぶ顔も、そして、快樂に溺れてはしたなく喘ぐ姿も——ノエルのすべてを、見たいと思う。

「入れる……ぞつ……」

——ずつ、ずぶぶぶぶうつ……。

上体を反らしかけた恋人の腰と背をしつかり抱いて、大量の蜜が漏れ出てくる割れ目へと、猛りきつたペニスを押し込んでゆく。

「ふあつ！ あ、あ——……つ！」

突き込むなり、ネットリと潤んだ膣壁がこぞつて絡みついてきた。震えながら、蜜まみれの肉ヒダが止め処なく、奥へと突き進む肉竿を掃き掠めてゆく。

「……つ、ノエル、ひよつとして……？」

熱烈な歓迎の理由を察して尋ねれば、見つめる先で恋人は真つ赤に上気した顔を小さくコクリ、頷かせる。

「つ、ふ、あ……だつ、て……ずつと、ずつと我慢、してたんだもの……貴弘が、いじわるつ、するからあ……」

引き攀れた膣肉が、侵入者を波状的に締めつける。待ちわびた末に訪れた強い快楽に、小さな絶頂を味わっているらしい。

その強烈な締めつけは、射精直後で敏感な肉棒にも膨大な肉の衝動を注ぎ込む。

——こつんっ。

大量の蜜が絡んでいることもあり、きつい締めつけをもものともせず一気に膣内を貫き通すことができた。

「うあつ！ あつ、あああつ！」

浮き上がりかけた尻を落ち着けて、ノエルがひと際大きな喘ぎ声をほとばしらせる。腹の中の感触を堪能するみたいに腰を揺すり立てるたび、押し出された蜜液が漏れて、おたがいの腿をしとどに濡らす。

「く、う……ノエルの中……いつも以上にドロドロになって、なのいきつく、俺のを締めつけて……っ、すぐく……いいっ、気持ち、いいっ……」

それよりさらに濡れそぼつ粘膜の歓迎を受けたどりついた、底の底。コリコリとした感触を愉しむように腰を揺すれば、乗っかるノエルの尻肉がぎゅつとすぼまり。連動した膣穴も、一段と締まりを増した。

「わ、たし、もっ……貴弘のがコツ、コツっておなかの奥に当たってるのっ……いいの、とても、感じるのおっ」

火照った息をおたがいの頬に、鼻先に感じながら、視線を重ねる。双方、腰は際限なく湧き通しの情欲に煽られて、いやらしく動き続けていた。

「た、貴弘……キス……して……？」

「ああ……っ」

どちらからともなく唇を寄せて、胸の中にたぎる想いを伝えようと、貪るみたいに激しく吸い立て、舌を絡める。

ぢゅぼぢゅぼと卑猥な音色が、上下の結合部から同時に響いていた。

指を絡め、左右それぞれ彼女の手をつなぎ止める。

「んふ、っ！ ふう、んっ、んんんうっ！」

ばぢゅっ、ぱんっ！ ばぢゅ……ううっ！

(ノエルっ……！)

鎧を着た人ひとりを見下から突き上げる格好のこちらよりも、上に乗るノエルのほうがはるかに動き制限は少ない。そのことを差し引いても信じられないくらいに、彼女は激しく腰を使い、恋人の情欲を搾り取ろうとしていた。

「ふあうっ……！」

かり……っ。

「んうっ!! あ……ノエ、ルっ……」

のけ反って唇を離す際、故意か偶然か。ノエルに上唇を再度甘噛みされた。ぷるんと弾んだ双方の唇を、唾液の糸が束の間、橋となつてつなぐ。

「離れたくない。離したく、ない——。」

あえなく切れた唾液の架け橋を見つめるうち。情欲よりもなお強い感情が渦巻いて、今唯一つながっている場所——腰を、目いっぱいね上げる。

「つあ!? ひあつあああつ!」

今度は、ノエルが驚き喘ぐ番だった。

「ごめん……俺、もう……我慢できそうに、ない……!」

「た、かひろ……私も……一緒に、最後まで抱き締めて……お願いっ……!」

頷き、抱き寄せた尻の温もりと柔らかさ。上半身の鎧の冷たさがあるだけになおさら指に伝わる感触が愛おしく、必要以上に力を込め、もみしだいてしまう。

「ふあ、んっ、あふうああつ!」

止まらない腰を繰り返し突き上げて、反り返る恋人の身体を抱き締める。鎧に隔てられて伝わらないはずの彼女の胸の高鳴りは、喘ぐ唇からこぼれてくる吐息の熱とリズムからうかがい知ることができた。

「この、まま……一緒に……っ!」

「たかひっ、ろ、つぶ、あつあうっうあああ……っ!」

回転を速めたピストンを受け容れる膣穴が、蕩けた蜜を漏らしながらキュウキュウと引き締まり、喘ぐ唇の代わりに意思を伝えてくれる。

小刻みな脈動を始めた龟头を受け止める子宮口もヌルヌルに潤っていて、腰を突き入れるたび、強烈な吸いつきで鈴口を歓迎してくれた。

「そつ、それえつ……ふあ、あつ、あア！ 奥、ゴンゴン突かれるのつ……イイいつ！」

切なさを訴える恋人の腰が、上下律動からくねる動きに変化する。膣内のヒダも腰の動きに合わせて目まぐるしく蠢動し、肉幹に新たな刺激を加えてくれた。

（く、つう……一気に、へそ下まで上って……きた、あつ……）

胸の高鳴りと競うように腰元からせり上がってきた射精衝動が、へその真下あたりでとぐる巻き、瞬く間に増長、増殖していく。

衝動に背を押されノエルを下から突き上げれば、むっちり肉の詰まった尻たぶに出迎えられる。直後に、ドスン——。真上から振り落とされる尻肉の圧力によって、再度膣の奥底まで肉の竿が吞まれてゆく。

ぐぢゅ！ ぢゅぶぢゅつぐぢゅぢゅつ！

「はあ、はあ……つ、ノエ……ルっ！」

「たかつ、ひろ……好きつ、大好き、いつ！」

喘ぎ混じりの告白が、ますますたがいの肉欲と慕情とを増幅させ、技巧をかなぐり捨て



ての貪欲な腰の動きを促進させる。

口を大きく開けて息を吸うくらい酸素が不足しているのに、それでも愛しさにかまけて再度唇同士を重ね。鼻で荒く息をしながら、相手の舌に吸いつき合った。

ぢゅぶっ、ぢゅっ、ぶぶぶっ！ ぱぢゅっ……ぬぢゅぶぶぶうううっ！

鎧に隔てられた恋人の温み、柔らかく滑らかな乳肌が急に恋しくなつて、代わりに剥き出しの双臀を再び抱き寄せ、突き上げる。

「ひゃ……あう！ た、かひろ……っ!？」

尻たぶをわしづかみにする際、偶然指先が彼女のすぼまり——尻の谷間に隠れていた小さな穴に触れた。途端、ギチギチといっそう腔肉が引き締まり。

「うくっ……!」

懸命に唇を噛み、嘔き出ようとするとする射精衝動をギリギリ食い止める。

排泄に用いるだけの、不浄の穴。貴族としてしつけられた彼女の意識下では、そんな認識が強いのもしれない。

尻穴を指先がかすめた直後から羞恥に溺れた顔をこちらの胸板にうずめ隠してしまった彼女の腔肉が、ひと際苛烈な蠢動しゅんどうを開始した。

それは、「早く射精して欲しい」「とどめを刺して」そんな風にねだっているようにも思われて。

「すぐっ……もう、すぐにイク、からっ……!!」

気を抜けば漏れ出てしまいうような衝動を腹部に押しとどめて、一緒に絶頂を迎えるためのラストスパートを仕掛けた。

十本の指でノエルの尻を抱き寄せては力のこもったピストンを繰り出し、昂奮のるつぽへと恋人を追い落としてゆく。

「や、やつ……だめえっ！　そこ、そんな風につ、されっ、たらあ、あひっ、ひっ、ああああああ……っ！」

「このまま……出すよ……!!」

喘ぎごと押し出すように告げた言葉に、彼女はただただ頷き、応えてくれた。

「んあっあっあうう！　くあっ、あア……!!　　つぶああああああ……っ!!」

高く、長く、甘い鳴き声と同時に痙攣する膣に促されて、深く奥まで突き入った肉の棒も絶頂の波に浸かる。

「くうううっ！　ああああ……っ！」

どぐツッ！　どくつ、どくつ、どぶ……どびゅびゅぶふううツッ！

振り返ってペンチから転げ落ちそうな、彼女。その潤みほぐれきった膣内粘膜めがけ。目が眩むくらい苛烈な衝撃、快感を、頭の中まで真っ白に染められながら吐き出していく。ひとりでに弾む腰を恋人の尻と腿とに押しつけて、最後の一滴まで注ぐべく、絶頂の

「それでは、ノエルちゃんと貴弘の門出を祝して！ かんぱーい！」
階下から、今晚幾度目か。数えるのも面倒になるくらい繰り返された従姉の乾杯の音頭が聞こえる。

「やれやれ。何時まで騒ぐつもりなんだか」

本日の主役、と祭りあげられたために、宴席で新たな顔に出くわすたび杯を（もちろん注がれるのはジュースだったが）勧められるはめになってしまった。さすがに閉口して二階にある自室に、たった今ノエルを連れて逃げてきたところだ。

「で、なにゆえそんな衣装になってるのか。教えてくれるか？」

「ああ、これは、ほら。この間、休みを利用して一緒に行つた貴弘の故郷土産」

正確に、訂正をさせてもらるのであればノエルさん。「わが故郷日本の電気街で、キミが一目惚れして買ったコスプレ衣装」ですよ、そのチャイナ服は。

「ちらっ」

「スリットをチラ見せしない。はしたないぞ」

こんなところ侯爵に見られたら、青筋立てて説教——どころか、頭から血を吹いて倒れられかねない。

「んもう。つれない反応ねえ」

酔ってるわけでもあるまいに。

(いや……よく見りや、ほのかに顔が赤い。それに火照ってるような?)

「酔っちゃった……♥」

「おまつ……まさか酒を……」

「宴席の雰囲気」

くすくす笑ってしなだれかかってくる彼女の肩に、思わずもたれかかり、脱力する。

「……貴弘が似合ってるって言ってくれたから、また着てみたくなつたの」

たしかに、酔っているみたいだ。

(ノエル……だけじゃなく、俺も)

階下の賑やかさが嘘みたいに、静まり返る自室。おたがいの息遣いだけが響く空間で、肌寄せ合っていれば、なおのこと。雰囲気酔いしれ、相手のことだけしか頭の中に浮かばなくなる。

「あの、ね。今日勝てたら、貴弘にあげようと思ってたものが……あるのだけれど」
立ち上がって向き直り、改まった様子で俯きがちに彼女が話します。

黒地に金刺繍の入ったチャイナドレスは、あつらえたみたいにぴっちり。ノエルの魅惑的なボディラインを際立たせてくれていた。

「もらって……くれるかしら？」

そっと目を閉じた恋人の前に立ち、彼女の身体を両手で順に、肩口から腋、背中を伝っ

て腰までなでさする。

「ン……目を閉じていると、感覚が鋭敏になってくみたい……」

小さく身悶える彼女の反応を、ゆつくりと手と指を動かすことで堪能した。

「俺はもうたくさん、ノエルに素敵なものをもらってるよ」

言いながら触れた生地の滑らかさ、布地一枚隔ててなお如実に伝わる温みと柔らかさに、よりいっそう酔いしれてゆく。

(この……手触り、って)

まさかと思いつつも、率直に問いかけることにした。

「もしかして……下着、つけてない？」

「んあつ……ええ。ブラも、ショーツも。この衣装の下にはなにも、着けてないの」

ノエルはしれつと言い放ってくれたが——告げられた側の昂奮は一足飛びで上昇。どうりで、ボディラインの丸みが綺麗に浮き出ているわけだ。目を凝らせば胸先や股間の突起まで見透かせそうな気がしてきて、ますます視線に熱がこもる。

「はしたない女の子は……嫌い？」

そんなの、愚問だ。

「前にも言ったろ？俺の前でだけやらしい姿を見せてくれるノエルのことが大好きだ」
恋人の腰を抱いて、正直に吐露する。

言葉で伝えるよりも手っ取り早いからと、ノエルの右手を取ってズボンの前へ。すでに
こんもり盛り上がり始めている股間へと、触れさせた。

「あ……もう、こんなに？ 私を、なでてるだけなのに……」

「ノエルが思ってる以上に、俺がぞっこんだったってこと。これで信じてもらえた？」

こくりと頷いて鼻先を胸板にうずめ、すりつけてくる。ふたりきりの状況で照れた時特有の癖を見せた彼女の右手が、勃起をやりわりさすりだした。

「ね……ベッドにもう一回、腰かけて」

言われた通りに腰下ろし、一旦離れた彼女の身体の温みと柔らかさを恋しく思いながら待ちわびる。

夜の長さに期待をかける気持ち胸の内湧き起こり、増殖してゆく。

ノエルの手が自らの左脇にあるファスナーを下ろしていく様を、高鳴る胸と股間をなだめすかしつつ凝視した。

「お待たせ、貴弘。さあ……」

前屈みに差し出された柔肌。ふたつのふくらみ。胸の下あたりまで衣装をはだけた状態で迫るノエルの艶姿に、思わず生唾を飲み、喉が鳴った。

前屈み姿勢の分、谷間は強調され、重力によって垂れ下がる乳房のフォルムがより卑猥なものとして視界に飛び込んでくる。衣装がずり落ちぬよう胸の下で腕を組んでいること

で、さらに巨乳の存在が際立っていた。

黒地のドレスからこぼれ出た肌色の双峰。ふたつの色が強調し合うことでさらに視覚的インパクトを強めてくれる。

ふに……。

「ふ、あ……ん」

逸る^{はや}気持ち在必死に抑えそつと触れた乳肌は、宴の余韻を残して少し汗ばみ、いつも以上に指先に吸いついてくる。

「汗ばんでるせいとか、いつも以上にもちつとしてる……」

すでに硬くなりつつあった桜色の乳頭をほぐすように指の腹でこね回し、たっぷりの乳肉に指を沈ませ、もみ立てた。

「あ、や、やだっ……」

恥じらいながらも「もつと触れて」とばかりに迫り来る谷間へ、思い切つて鼻をうずめ、こもる熱気を吸い込んでみる。

「ひゃうっ！」

驚いた拍子に前のめりに倒れかかってきたノエルの胸の谷間に、ずっぽり。勢いよく顔面が挟まった。

(ぼかぼかしてる……ノエルのおいで、いっぱいだ……)

「自然と恋しさが込み上げ、鼻を鳴らして何度も吸い込む。

「あんっ、こ、こらっ。女の子のにおい嗅ぐなんて……マナー違反なんだからあ……っ。ただでさえ胸の谷間とか下は汗かきやすいのに……」

少し拗ね気味に告げつつも、彼女の右手は再びベッドに腰かけたズボンの股間へと寄り寄る。そして接地するなり、上下にすりすり扱きだした。

「ふふ。お返し♪」

「んっ、ううっ！」

ビグビグとせわしなく、牡肉が歓喜の鼓動を響かせる。

思わずのけ反り、頭から仰向けにベッドに倒れ込み。

「ん……しょ……失礼、するわね……」

間髪いれず騎乗体勢に移行するノエルの生足。今まさに顔を跨いでいった、肉づきよく健康的なその脚線美に、見惚れてしまう。

足首近くまで丈があるドレスだが、深いスリットによつて前後に割れた衣装の奥に覗く恋人の陰部が、近づくにつれ鮮明となる。

ヒクヒクと蠢き蜜垂らす割れ目を、今夜はしかとこの目で捉えることができた。

(濡れて……きらめいてた)

ズボンの前のふくらみは相も変わらず彼女の右手に握られたまま。ノエルの手のひらに

感激を伝えようと、繰り返し脈を響かせる。

「ノエツ……わぶっ！」

チャイナドレスでエッチすることが、お前の言う「あげたいもの」だったのか？
問おうとした矢先にドレスのスカート部分に頭から覆われ、視界は暗転。

剥き出しとなった彼女の尻が顔の上に乗っかってきて、言葉の続きは封じられた。

(い、息、苦し……尻肉に挟み込まれて首も動かせない……)

わずかな隙間から空気を吸えば、むずかる尻がゆさゆさ。悶え動いて、ますます圧を強めてくる。彼女の尻の火照りが移ったみたいに、頬から顔全体が熱を帯び。

にゆるりと湿った触れ心地が、唇をかすめていった。

(今の……ノエルの……?)

ついさつき視認したばかりの、恋人の股間の湿り気。割れ目から滴った蜜であると、鼻先に漂う残り香と、唇に残る味わいから確信する。

気づかれたことを察したノエルの尻が震え、また、どっと甘い香りが増した。

「んっ……あ、ふぁ……っ。苦しそうなこの子も、早く出してあげなくちゃ……」

身悶える少女の手によってズボンのファスナーが下ろされ、そこから硬く反り立つ肉の棒が取り出される。

「ん……ふ……いつもの、貴弘のにおい……」

「んくっ！」

取り出すなり幹に頬ずりしてみせた彼女の鼻息に亀頭をくすぐられて、思わず腰を突き出してしまふ。

(ノエルは俺のことをにおいフェチだつて言うけれど、ノエルだつて大概……)

どこまでも似た者同士。性癖まで同じだというのなら、きつとこれはもう運命だ。

鈴口から染み出す先走りを指先に絡みつけながら、竿を優しく包み扱きだす巧みな指さばきを感じ入りながら。スカートとふとももにさえぎられ真つ暗な視界の中で、どうにか騎乗する彼女の股間を再視認しようと試みる。

スンスンと鼻を鳴らせば、甘酸っぱい恋人のにおいがじわり。鼻腔から脳天にまで染み広がり、ジンとしびれるような愉悅に腰が震えた。

「やあ、ンッ、くすぐったっ……ふあ、あ、ああ……んんっ」

ノエルも甘い鳴き声をこぼしながら腰揺すり、小さな刺激を増幅させようと躍起になっている。

「っ……ふう、ふうう……っ」

「うあっ……!？」

息を吹きかけられた亀頭が、鈴口にしづくを浮かせたまま猛々しい脈を打ち放った。

喜悅の鼓動に乗せられ染み出た新たなしづくが、古いしづくを押し出すように鈴口に浮

かぶ。押し出されたしずくは順次、幹を濡らしながら伝い落ちていった。

「やあ……もつたい、ない……」

れるるっ……。びぐっ！ びぐびぐっ！

（くうっ！ こ、これは予想以上にっ……。ひ、響いてっ！）

視界を奪われているせいで、より刺激に敏感になっているようだ。軽く舌を這わされただけで、肉の棒に愉悅のしびれが突き抜ける。

さらにノエルは先ほど垂れたしずくを弾む幹へとすりつけ。滑りのよくなったことを確かめるや、どんどん手コキのペースを速めてきた。

「ん……っ、す、少し前にずらす……ね」

上下互い違いの姿勢で重なり合うシックスナインの体勢から、むずかる尻をわずかに浮かせ。ノエルは身体を前へずらして再度体勢を整える。

彼女が上体を倒したことで、新たにむにゆりと柔らかな感触が腹部付近に押し当たる。

（柔ら、かい……!）

餅のように弾力豊かなふたつのふくらみ。きめ細やかな乳肌の感触が心地よく染みきて、また一段。青筋浮かせた肉の竿が膨張した。

「……ぶあっ！ はあ、はっ……。ツツ!!」

いまだスカートの中ながら密着状態から解放され、ようやく闇一色の世界から抜け出た

視界に、間近で揺れる双臂の丸みが映り込む。その谷間に息づく小さなすぼまりと、そのラインの先にある割れ目までもが丸見えで、視線は瞬時に釘づけとなった。

尻穴は彼女の呼吸に合わせ収縮する。きゅつとすぼまった状態から花咲くように開く様がやたら淫靡に思われて、自然と鼻息が荒くなる。

舌が届きそうもない位置に離れていってしまった腔口は、距離を取ってなお濃密な女の香りを漂わせていた。

今しがたまで密着状態で味わえていた甘酸っぱい液体。愛液でしとどに濡れた陰唇は絶えず震えっぱなしで、まるで手招きされているようにすら思えてくる。

「ノエルっ……！」

むぎゅっ！

「やんっ」

反射的にノエルの腰に両手を伸ばし、尻たぶをつかんだその手を支点として自由になった頭を持ち上げ、再接触。柔肉に頬ずりしつつ、谷間へと顔をうずめた。

「ひゃっ！ あ、や、あんんっ……く、くすぐったいって、あうっ！ ふあ、あ、ああ、は、恥ずかしくって、顔から火が出そう……」

でも、がつつかれるのも嬉しいかな——。

ささやき亀頭に熱い吐息とキスの雨を降らせた恋人が、また身じろぎ。

「胸で……するわね……」

告げるが早い。ばふ、と餅肌に肉棒が左右から押し包まれる。腰が蕩けそうになる触感に、自然と肉棒の硬度も高まっていく。

「あ、あ……すぐく、いいよっ……柔らかくてっ、あつたかいっ……」

マシユマロの中に突き入れているみたいだ。

なのに弾力も強くあつて、肉棒が谷間で脈打つたび、左右の乳肉が押し返してくる。

「ん……やっぱり、貴弘が感じてくれてるんだって思うだけで……嬉しくなっちゃう」

両手で寄せ上げた胸を小刻みに揺すって、勃起ペニスをこね扱きながら、彼女が言う。

先走り汁とノエルが垂らした唾液がグチュグチュ。いやらしい音色とともに攪拌され、泡立つそれがひと際密着感を高めてもくれる。

滑らかな乳肌が粘液と絡んで肉棒に吸着する感覚は、たまらなく甘美で——見る間に腰の芯に血液が充足した。

（あ……っ！ また、ノエルのお尻の穴が……ヒクヒク、蠢いて……）

パイズリに励む彼女が力むたび。目の前で揺らぐ尻の谷間で、連動して小さなすばまりが収縮する。

——っんっ！

「ふあっ!!」

指先でつつけば、ノエルは驚きつつも唇噛んで許容し、ますます乳圧を強めてくれた。

「先っぽ……っう、頼むっ……」

そしたら、俺はココを愛でるから。言葉ではなく行動で、すぼまりの上に乗せた指をくるくる回し、しわの寄った部分を搔くようにすることで、意思を伝える。

「ん……っ、ふ、っ、あ……っう、んっ……れちゅうっ」

恋人は、ほんの少しの逡巡しゆんじゆんをただけで亀頭に唇を押し当て、間を置かず熱烈なキスの雨を降らせてくれた。

「くっ、う……じゃあ、こっちも……っ」

ぴちゅ——。

割れ目と尻穴の中間点付近に、そつと舌を張りつけた瞬間。ノエルの腰が大きく縦に弾み離れかけたのを、あわてて抱きとめ引き寄せる。舌先滑らせくすぐった尻穴は、異物の進入を拒むようにきつく閉じていた。

「ご、ごめんなさい……驚いただけ、だから……」

深呼吸を重ねるたび。恋人のすぼまりは徐々に強張りをなくし、ほどけゆく。

「ゆっくり……するから……」

急ぐ必要はないのだと伝えると同時に、そつと陰唇に指這わせ、すりすりと優しくなで擦ってやる。

「ふあ……っ、ん……あ……それ、いい……っ」

指と股肉との接地面で、すぐに淫靡な水音が響きだす。指にまとわりついた蜜液を、彼女の股間の丸みに沿って這い運び、指と舌を総動員して丹念にすぼまりへと塗りつける。

「ひうっ！ あっ、あひ……っ！」

指でしわを広げ、舌をその隅々にまで這いずらせては蜜を塗る。舌先を浅く突き込むことでこじ開けたすぼまりの内部へは、一番細かい小指を潜らせ蜜を押し入れた。

応じる彼女の声は、最初、緊張と情欲とが均等にまぶされていたのだけれど——尻穴への愛撫を重ねるにつれて、情欲の甘い響きの印象が強くなる。

「ふあむっ……んちゅ、ちゅうううっ！」

未知の快感に耐えるためなのか。喘ぎほとばしらせる勢いそのままに亀頭にかぶりつき、ノエルはパイズリフェラに没頭していった。

(……っ、勃起した乳首が、擦れるのが、たまらない……っ……)

左右のリズムを変えて不規則に肉棒を抜いてくれる彼女の乳房の中心で、しこり立った乳首がたびたび存在感を主張する。コリコリとした触感に擦れるその都度、肉棒は雄々しく跳ねて、真新しい先走り汁を浮き上がらせた。

「ぢゅちゅうっ……んふう……っ」

浮かんだ先走りは片っ端から吸われ、恋人の腹の中へと落ちてゆく。



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>